

IV マッピング

1. マッピングの意義

多くの施設では、独自のシャント管理をしていると思われる。慢性血液透析用バスキュラーアクセスの作製および修復に関するガイドライン¹⁾でも、シャントをモニタリングするプログラムを確立することの重要性について述べられている。

シャントマップはその一つの手段であり、スタッフ同士や患者との大切な共有情報である。エコーなどで定期的に見る場合も、前回のシャントマップを確認して、その時の問題点を再評価する。エコーを活用することで、穿刺場所のみ記載のシャントマップではなく、シャントの情報を的確に伝えることができる。

1 シャントマップ作成、活用法

シャントマップ作成において必要な情報は、①実際のシャント肢の写真、②血管走行のイラスト、③穿刺部位などである。エコーでさらに機能評価（シャント血流量、血管抵抗）や形態評価（狭窄部位、血管の深さ、血流の向きなど）を行い、シャントマップに記載する。

また、穿刺困難な症例でも、新たに穿刺可能な静脈をエコーで確認することができる。

ただ、すべてを記載すると最も大切な情報が伝わりにくく、穿刺をする際に透析室での混乱を招くことがあるので、必要最小限にする。図1に、当院で行っているシャントマップを示す。ただし、PTA後の定期フォローの場合、電子カルテに内膜肥厚、静脈弁の石灰化、シャント瘤の大きさなどを細かく記載し、次の検査の情報へとつなげている。

当院では、パワーポイントを用いてシャントマップを作成（図1）し、PDF形式で保存している。一度、シャント走行を記載したイラスト画像を作成すると、新たな再建術をしていないか

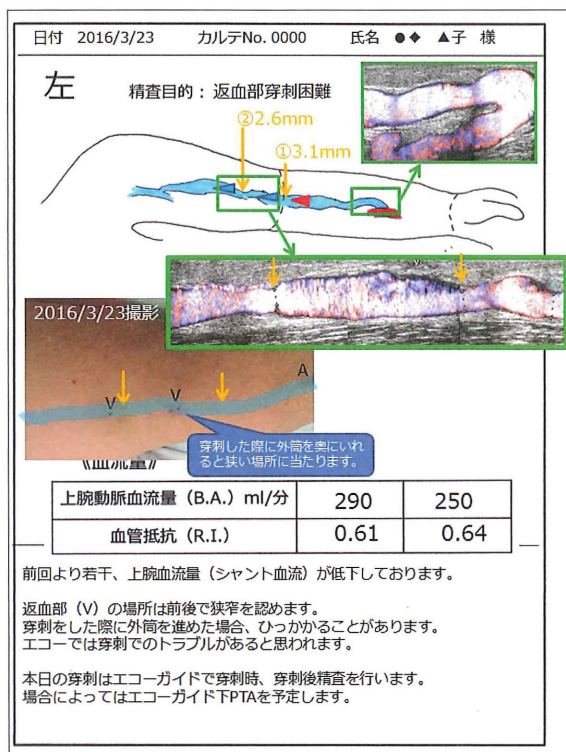


図1 パワーポイントで作成したシャントマップ

り、数値の変更、エコー所見の変更でよいと思われる。

2 情報管理法

当院では、クラウドサービスを用いてシャント管理をしている。他施設（当院では分院）に返事を書かずにシャントマップをクラウドで保存し、すぐに分院のベッドサイドで閲覧することが可能である（図2）。シャントマップが紙管理であった場合、記載は容易であるが、いざ必要になった時にカルテを取り寄せたり、電子カルテを開いたりしてすぐに確認することができないが、クラウドサービスを活用するとタブレット端末で確認す



図2 クラウドサービスを用いた情報管理
必要な時にベッドサイドでタブレット端末を確認することができる。

ることで時間の短縮につながる。1つのフォルダに個々のシャント情報を管理することが可能である。

参考文献

- 1) 慢性血液透析用バスキュラーアクセスの作製および修復に関するガイドライン, 透析会誌, **44** (9): 855 ~ 937, 2011.

(鈴木 敦)